

《非公表プログラムの事例》

1. 特に効果的であり改善に資した事例について

B. 円滑な学位授与の促進

①複数教員による多面的な指導体制の整備

●事例 1

(具体的に何を実施したのか)

後期課程の研究指導を複数の教員により実施するために、研究科が主催する研究成果報告会を年間2回開催するとともに、学生が主催し研究科ならびに外部の教員を招聘する研究会を毎月開催する体勢をプログラムコーディネータの指導で整備した。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

研究科が主催する報告会と並行して、学生が主催する研究会を頻繁に開催する体勢を整備することで、研究科教員の多くがそれぞれの学生の研究に関心を持つように配慮した。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

博士學位論文に必要な助言を複数の視点から迅速に行う事ができるようになった。学位取得の可能性についての研究科教員の判断が審査会までに徐々に形成されるようになった。その結果、博士學位の授与への抵抗感が軽減した。

《非公表プログラムの事例》

1. 特に効果的であり改善に資した事例について

B. 円滑な学位授与の促進

②厳格な成績基準と評価基準の設定や学位授与プロセスの明確化

●事例 2

(具体的に何を実施したのか)

学位取得の目標となる研究の質・量を明示化した。特に、学位申請論文のイメージを明確化するために「博士論文の目安」(64頁の冊子)を作成し、新学期ごとに配布した。また、この内容を4専修による合同授業(特殊講義)(半期2単位)において強調し、理解を促した。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

「学位取得に必要な実証研究の質と量を、学生が明確なイメージをもって把握できていない。」という問題を解決するために、「博士論文の目安」を作成した。そのために、24人の教員が、それぞれA4、1-2枚にわたり「学位取得に必要なと思われる研究の質と量」についてまとめた。このような目安について教員間で議論したのはこれが初めてであり、教員により基準が大きく異なることが明らかになった。そのため、明示化することへの躊躇もあり、また、基準を統一することは困難であったため、例示にとどめたが、大きな第一歩であった。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

本プログラムの目標の第一は、学位取得率を上げることであった。

①修士については、高い学位取得率、年限内取得率を維持することができた。

これは他専攻と比較すると、より明確である。具体的には、18、19、20、21年度の修士号取得率は、80、114、82、91%(他専攻は112、77、82、82%)、年限内取得率は65、91、77、77%(他専攻は83、60、59、51%)である。低下は少なく、また、他専攻に比べ高い水準を保っている。

②博士については、学位取得率が向上している。18、19、20、21年度の博士号取得率は28、53、38、157%(他専攻では27、43、36、49%)、年限内取得率は11、20、0、14%(他専攻は14、11、11、8%)であり、年次とともに、28%から157%へと大きく増加した。